

# 新社長見参!

事業承継は、どの企業でも悩ましい問題だ。社長を継ぎ、社員とその家族の生活を預かることへの思いとは? 就任間もない新社長に聞いた。

## 沼部敏忠さん 代表取締役社長 マツモトプレジジョン株式会社

主な事業内容: 精密機械部品の加工  
本社所在地: 福島県喜多方市  
社長: 沼部敏忠  
資本金: 7000万円  
創立: 1948年  
従業員: 200名  
URL: <http://www.matsumoto-pre.co.jp/>

### 宝飾を売る業界から 精密機械の物づくりに

「娘婿の私が義父の会社を継ぐことになるのは夢にも思っていませんでしたが、70年の歴史を持つ企業を後継者問題で終わらせてはいけないと思ったのです」と、マツモトプレジジョンの沼部敏忠社長(50歳)は語る。

沼部社長は、2017年6月に松本榮二会長から社長職を引き継ぐ。大学卒業後に就職した宝飾品卸の会社で松本会長の長女と職場結婚。40代半ばにして、宝飾販売から畑違いの業界である物づくりの世界へ飛び込んだ。

マツモトプレジジョンは、福島県喜多方市に本社を置く。自動車エンジンの部品や工作機械などに使われる油空圧部品、工業用ミシン部品など精密機械部品の加工を手がける会社だ。とくに油空圧部品が好調で、15年に第三工場を建設、生産量が3割アップし、17年度は27億円と過去最高の売上高を見込んでいる。

松本会長には娘が2人いるが、後継者はいなかった。長女である沼部社長の妻は、異業種であることから、夫の事業承継には不安を抱いていた。沼部社長にもその気はなかったが、松本会長(当時社長)が自動車事故で入院す

ることになり決断したという。

その時、沼部社長は宝飾品の製造販売を行うJASDAQ上場企業のサダマツ(現・フェスタリアホールディングス)でグループ長を務めていたが、松本会長に強く請われて同社を退職。14年に松本機械工業へ入社し、17年の社長就任と同時に、社名を現在のマツモトプレジジョンへと変更した。

「サダマツには骨を埋めるつもりでしたがし、貞松隆弥社長にもよくしていただき慕っておりましたので退職は断腸の思いでした。私はずっと物を売る仕事をしてきたので、物をつくる会社で通用するの不安もあったのですが、これまで培ってきたブランディングやマーケティングなどの力をこの会社を持ち込めばプラスになるのではないかと考えました」

### 家業の質店を継ぐために 宝飾品卸の会社に就職

沼部社長は1968年、東京生まれ。実家は100年以上続く大きな質店で、

自身も小さいころから質店を継ぐつもりだったという。

「親戚も各地で質店を経営しており、経営規模を拡大するために3世帯が新宿区の本店に集まって、父を含め3人で共同経営していました。商売は順調でした。親戚が1カ所で生活するという今時珍しい大家族で、正月などは賑やかでしたね。わが家は4人兄弟で、2人の兄もそれぞれ宝石、時計を扱う会社を起こしました。もともと兄達も家業を継ぐつもりでした」

しかし、共同経営の後継ぎ問題の整理がつかない状況で、沼部社長の兄2人は就職した後、それぞれ独立。沼部社長もいつかは家業に役立てようと、宝飾ビジネスを勉強するため大学を卒業後、三菱商事の100%子会社である貴金属宝飾品卸のエム・シー・ゴールド(現・アールジェイジュエリーサービス)へ90年に入社した。

2003年には、大手アパレルメーカーがジュエリーの新規事業を立ち上げるため、沼部社長が出向する。

# 備えあれば憂いなし 地域と世界から認められる 100年企業へ!



いま社員に読ませたい本として『リーダーのコミュニケーションの教科書』(沖本るりこ著・同文館出版)、『Action! トヨタの現場の「やりきる力」』(原マサヒコ著・プレジデント社)を挙げてくれた

「ここで、ブランディングや事業の運営を学びました。物を売り、ブランドを確立するには、顧客の心の中まで入り、深い満足度を獲得しなければならぬ」ということを初めて知り、とても勉強になりました。この経験が私の土台になっています」と、沼部社長。

その後、さらにブランディングの勉強をするために11年、サダマツに入社した。同社では商品企画のトップであるグループ長に就任し、マーチャング

イジングの責任者となった。

「このとき、貞松社長の近くで、いろいろなお話を聞いたり、教わりました。その言葉の数々は貴重で、いまでも思い出しますし、私の経営に活かされています」

たとえば、「夢を持つことはノルマだ」という貞松社長の考え方を重視。現在、マツモトプレジションにおいて社員に仕事と生活の両立を促し、夢達成への支援をする考えでいる。

「蛻変の経営」という言葉もある。蛻変とは蟬が卵からかえって成虫に変態する様子を指し、変化する環境の中で、企業も意識的に変わらなければ生き残れないという意味だ。

## ワークライフバランスを重視 自ら「イクボス」宣言

こうした変化の意識をマツモトプレジションにも取り込むため、沼部社長は代表に就任するとともに社名を変更し、ミッションステートメントを策定した。そのビジョンとして「地域社会に認められる」ことを掲げている。

「企業は継続こそ力です。過去の70年間を振り返り、スピードと変化の激しい時代に自社の強みを活かしながら新たな30年を拓き、100年企業」を目指したいと思います」

沼部社長は入社翌年の15年、東京中小企業投資育成主催の「次世代経営者ビジネススクール」(第13期)に参加、そこで学んだことがミッションステートメントづくりに活かされたという。

100年企業を目指すには、企業としての土台である経営理念を改めて明確にすることが必要だと考えた。

「企業は人に尽きます。人づくりこそが私の役割で、そのために、働き方改革委員会」を設置するなどワークライフバランス重視の経営を目指しています」

単なる残業削減では意味がない。生産性を上げて、企業の収益と従業員の収入を増やすことが真の働き方改革だと沼部社長は考えている。

そのため、これまで不明確だった給与体系を整え、給与の構成がどうなっているのか誰もが納得するように変えた。また、一律だった賞与にも能力評価を導入してメリハリを付けた。

ワークライフバランスを考え、沼部社長自ら「イクボス」を宣言し、有給休暇取得を進めるために連続の休暇を年2回取得するリフレッシュ休暇制度を導入した。

さらに、地元の消防団などの地域活動、子どもが通う学校のPTA活動などに参加する場合も休暇を取れるように制度や社風を変えようとしている。

座右の銘は「備えあれば憂いなし」だという沼部社長は、まさに変化に対する備えを整えている最中だ。

「日頃の準備なくして、いまの自分はありません。ベンジャミン・フランクリンは『準備に失敗することは失敗の準備をすることだ』と言っていますが、100年企業に向けて準備の失敗は許されません」

同社の備えは怠りがないようだ。

\*イクボス＝職場でともに働く部下・スタッフのワークライフバランスを考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の業績も結果を出しつつ自らも仕事と私生活を楽しむことができる上司のこと(厚生労働省福島労働局長「イクボス宣言」より)